

『杜騙新書』の明刊本について

氏岡 真士 閻 小妹

1.

京都大学附属図書館が蔵する明刊本『杜騙新書』は、見返しに以下の書き込みがある。断句して示す。

杜騙 杜，塞也。騙，誑也。言知此書，則可以杜塞誑騙矣。

字彙云，𨔵，匹見切，音片，躍上馬也。騙同上，今作誑騙字。誑，渠放切，狂去聲，謬言一曰狂言，今律為誑騙字，讀平聲。

誑，倭訓多布羅加須。騙，倭訓多羅須。

(杜は、塞なり。騙は、誑なり。言うところは此の書を知れば、則ち以て誑騙を杜塞すべし。

『字彙』に云ふ、𨔵、匹見の切、音は片、躍りて馬に上がるなり。騙は上に同じ、いま誑騙の字を作る。誑、渠放の切、狂の去声、謬言は一に曰く狂言、今律に誑騙の字を為し、平声に読む。

誑、和訓はタブラカス。騙、和訓はタラス。)

杜騙という言葉は、たぶらかしを防ぐ意味であることが説明されている。この本の内容は詐欺事件の類を描く短編小説の集大成であるから、けして犯罪を助長する意図は無いことを強調するために、杜騙という言葉を表題につけたものであろう。

具体的な内容については、たとえば伊藤加奈子ほか『「杜騙新書」訳注稿初編』（『杜騙新書』の基礎的研究」プロジェクト、2015年）に詳しい。本稿では、テキストとしての明刊本をめぐる諸問題を論じよう。

2.

『杜騙新書』の明刊本は、管見のかぎり以下の6か所に蔵される。

国立公文書館内閣文庫
前田育徳会尊経閣文庫
東京大学東洋文化研究所
京都大学附属図書館
大連図書館
ハーバード燕京図書館 (Harvard-Yenching Library)

日本に4部、中国とアメリカに1部ずつ存することになる。ただし京大本は、全4巻のうち巻一・二のみである。また尊経閣本のみが、「叙江湖奇聞杜騙新書」と題する序文を巻頭に有し、“萬曆丁巳年（1617）”の紀年がある。

出版者については、いずれも封面（扉）には“存仁堂陳懷軒梓”と記すが（ただし大連本は封面を欠く）、いっぽう巻頭（巻一・二）では“書林□□□□梓”となっており、書肆名が空欄である。

これら明刊本のうち東大本とハーバード本は、すべての書影がネット上で公開されている。また影印本には、以下の3種がある。

明清善本小説叢刊本（天一出版社、1985年）
古本小説叢刊本（中華書局、1991年）
古本小説集成本（上海古籍出版社、1992年）

このうち古本小説叢刊本はハーバード大学の蔵書印が微かに見える（巻一1b）。また古本小説集成本もハーバード本だと曹中孚「前言」は称するが、舒穆氏は『中国古代小説総目・白話巻』（山西教育出版社、2004年）で以下のように指摘する。

美國哈佛大學燕京學社漢和圖書館藏本有中華書局《古本小説叢刊》影印本，其卷一“好賭反落人術中”一則全闕。上海古籍出版社《古本小説集成》影印本按“前言”，亦著錄美國哈佛大學圖書館藏本，但與《古本小説叢刊》本有二處不同：一是卷三首葉圖及當葉B面文字，顯然另刻；二是卷一“好賭反落人術中”多出一葉又半葉。

（アメリカのハーバード大学燕京学社漢和図書館〔ハーバード燕京図書館の前身〕に蔵されるテキストは中華書局『古本小説叢刊』の影印本があるが、その巻一「好賭反落人術中」の話が欠けている。上海古籍出版社『古本小説集成』影印本は「前言」によれば、やはりアメリカのハーバード大学図書館所蔵のテキストを収録しているが、しかし『古本小説叢刊』本とは二つ違いがある。まず巻三の第1葉の挿絵

から同じ葉のウラ面にかけてが、明らかに別の版木である。つぎに巻一「好賭反落人術中」の所が1葉半多い)

2つの影印本を見比べてみると、たしかに舒氏の言うような観察も可能なのだが、実際はどうだろうか。

古本小説集成本を内閣文庫本と対校してみよう。すると巻三第1葉に限らないが、古本小説叢刊本とは異版に見える字句が、じつは内閣文庫本では補写されていることがわかる。影印本と言っても濃淡を飛ばしてしまっているのが、破損が無いように見えても無理は無い。

ハーバード本や古本小説叢刊本は、巻一46b第9行(末行)に「好賭反落人術中」のタイトルはあるが、第47葉以下が欠けている。古本小説集成本は48aまでであるが、話が終わっていない。48b以降があるかどうか不明である。この点も内閣文庫本と同じである。

ところが、古本小説集成本と内閣文庫本が明らかに異なるのは封面である。内閣文庫本の封面に目立った破損は無く、匡郭の上に“騙字以為証義則往往義通(騙の字は以て証の義と為せば則ち往往にして義通ず)”という後人の朱書まである。ところが古本小説集成本では、匡郭内の第2行から第5行にかけて上から3字目あたりまで、すなわち“牙行騙・強搶騙・婚娶騙・僧(道騙)”といった字句があるはずの個所が破損している。そしてこの点だけは、ハーバード本や古本小説叢刊本と酷似するのである。

じつは明清善本小説叢刊本も、内閣文庫本と酷似しているが、封面の影印は無い。一般論として当時の中・台から出版された影印本はしばしば封面を省くこと、およびその背景については大塚秀高「三統研究前後」(『中国古典小説研究』第4号、1998年)に指摘があるが、この場合も事情は同様であろうか。

ともあれ古本小説集成本は、先行する明清善本小説叢刊本と古本小説叢刊本の双方の特徴を部分的に継承していることになる。そしてこれら3種の影印本はいずれも巻一「好賭反落人術中」の結末を欠く。結末は巻一48bに記されており、東大本をネット上で閲覧するのが便利であろう。ただしこのテキストも目録第1葉など補写部分がある。

序文も有する尊経閣文庫本が最も完全に近いが、巻四5a第3行の冒頭3文字などに破損がある。これらのテキストは版木の断裂なども一致するから同一視して良いのだが、なにぶん古い書物で一定の傷みは免れないから、閲読に際しては複数のテキストを参照したほうが読みやすいと言えよう。

3.

日本に『杜騙新書』がどのように伝わったかは不明の点が多い。たとえば大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、1967年）を見ても、関連の記述は見出しにくい。ここでは明刊本の封面などに捺された蔵書印から、明刊本『杜騙新書』の旧蔵者を探り、往時における伝来や受容のありかたを知る手がかりとしよう。

<前田育徳会尊経閣文庫蔵本>

各巻の見返し中央に「前田氏尊経閣図書記」の朱印があり、また序文1 a 右下に「読耕斎之家蔵」と捺されている。なお封面右下や序文1 a 天頭（上部欄外）にも印影が窺えるが判読できない。

尊経閣文庫は加賀前田藩の前田綱紀（1643～1724）の収集品が中心とされるが、この『杜騙新書』は林羅山の四男の旧蔵書であったと考えられる。四男こと林読耕斎は父の没後4年で三十八歳の若さで亡くなった（1661）。父から譲られた蔵書印「読耕斎」ではなく「読耕斎之家蔵」の印を用いたといい、また望月三英（1697～1769）『鹿門隨筆』によればその蔵書を林百助がおびただしく払い出したという（国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』雄松堂出版、2002年）。『鹿門隨筆』は富士川游ほか編『杏林叢書』に翻刻を収め、そこに“道春の弟、春齋先生と云。今の林百助、其子孫なり、読耕斎印と云朱印押たる本、夥敷（おびただしく）拂（はらひ）に出る”という記述が見える（句読等は新たに付した）。道春は林羅山の出家後の号、春齋は弟（林永喜）ではなく息子（読耕斎の兄）の鷲峰の号であろう。百助はその孫に当たる（1688～1743。『寛政重修諸家譜』巻770・771）。

<国立公文書館内閣文庫蔵本>

目録1 a の右下から右上にかけて「佐伯侯毛利高標字培松蔵書画之印」「浅草文庫」「日本政府図書」の3つが捺されている。

毛利高標（たかすえ。1755～1801）は豊後佐伯藩主で、旧蔵の古版本二万余冊は文政十一年（1828）になって幕府に献納された。浅草文庫（1874～1881）は明治政府による公開図書館である。また官庁中央図書館としての太政官文庫が、内閣制度の発足に伴い内閣文庫と改称された翌年（1886）から、「日本政府図書」はその蔵書印として1932年まで用いられた（国立公文書館『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』1981年）。

<東京大学東洋文化研究所蔵本>

見返しや封面に「阿原」、また目録1 aの右下から右上にかけて「清斎蔵書」「双紅堂」「静齋蔵書」「東洋文化研究所図書」の4つが捺されている。

阿原や清斎が誰を指すかは未詳。ただ九州大学附属図書館所蔵の荻生徂徠『皇朝正声』はやはり「清斎蔵書」印を有し、それは国文学研究資料館「蔵書印データベース」所収のものと同じである旨の回答を得たが、同DBが収めるのは東大本『杜騙新書』の「清斎蔵書」印である。双紅堂は長澤規矩也(1902~1980)の文庫名であり、静齋も長澤氏の号である。氏の「わが蒐書の歴史の一斑」(『長澤規矩也著作集』6、汲古書院、1984年)には、“五月に沖森から明万曆刊本鼎刻江湖歴覧杜騙新書を入手”と記されるが、それは1939年のことであった。

<京都大学附属図書館蔵本>

目録1 aの右下から右上にかけてと左下にそれぞれ「平安堀氏時習齋蔵」「京大図」「京都帝国大学図書之印」「百々復太郎寄贈」の4つが捺されている。

堀杏庵(1585~1643)は藤原惺窩の門下四天王の一人とされる学者だが、もとは近江の人で、京都南禅寺で手習いの後、医学を学んだという(大島晃「堀杏庵」、『漢文学解釈と研究』3、2000年。雅俗の会「先哲叢談聚議」その七、『雅俗』7、1994年)。堀氏の旧蔵書には魏忠賢の専横と破滅を描いた『皇明中興聖烈伝』(東京大学東洋文化研究所蔵)や文言小説集の『燕居筆記』(佛教大学図書館蔵)などもあり、同じ蔵書印が捺されているのは興味深い。さてこの『杜騙新書』については、のちに“故医方ノ大家百々漢陰及其父翁南岳両先生ノ遺書トシテ其孫百々復太郎氏ヨリ五千七百四十九冊”が京都帝大に寄贈されたなかに含まれることとなる(「故人記念図書(其一)」、『京都帝国大学図書館案内』1908年)。

<ハーバード燕京図書館(Harvard-Yenching Library)蔵本>

目録や巻二~四各巻の1 a右下に「馥園」、巻一1 b右下に「哈佛大學漢和圖書館珍藏印」、巻二~四各巻の1 b右下に「哈佛大學哈佛燕京圖書館珍藏印」と捺されている。

馥園は、『清人室名別称字号索引』(上海古籍出版社、2001年)によれば許立身・陸桂馨の2名が該当するが、詳細は不明である。

<大連図書館蔵本>

序も目録も無いが、裂痕など版面の特徴から他の明刊本と同版であると認められる。蔵書印は各冊の見返し(遊び紙)表に「大谷光瑞蔵書」、裏に「S. M. R. LIBRARY」「南

満州鉄道株式会社図書印」、本文1aに「旅大市図書館所蔵善本」「大連図書館蔵」とあるほか、さらに巻二・四の遊び紙裏には「写字台之蔵書」の単行長方形印も見られる。

これらの蔵書印や、広く大連図書館の現況については、たとえば木田知生「大連図書館及び同館所蔵の地誌について―「大谷文庫」本地誌を中心に―」（龍谷大学『仏教文化研究所紀要』45、2006年）に解説されているが、中国小説に関しては大塚秀高「大連図書館「大谷本」稗史小説について」（『中国古典小説研究』9、2004年）が詳細を極める。この『杜騙新書』はごく単純に言えば、浄土真宗本願寺派第22代門主であった大谷光瑞（1876～1948）の旧蔵書が、満鉄を経て旅大市（現在の大连市）の所管となったわけである。そして写字台は門主の居室のことで、歴代門主の収蔵品には「写字台之蔵書」と捺印されている由だが、大塚氏は宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』（同朋舎出版、1982年）の所説を傾聴すべしとする。宗政氏によれば、これら“唐本小説稗史類のほとんどは文如上人の所蔵書であった。そして、その蒐書もまた文如上人によってなされたものであった”（404頁）。文如（1744～1799）は第18代門主である。ちなみに『杜騙新書』は“二部”あったと記録されるが（412頁）、詳しいことはわからない。

大連本『杜騙新書』の特色は本文の傍らに朱書された音義にあり、詳しくは付録として末尾にまとめておく。音義はしばしば俗語的な表現に付されるが必ずしも適切とは言えず、中国語を母語としない者によって書き込まれたことが窺える。また岡島冠山『唐話纂要』のごとき唐話を読むための参考書が出現する以前の書き込みである可能性も示唆されていると言えよう。ちなみに『唐話纂要』は享保元年～三年（1716～1718）の刊である。

4.

明刊本巻一・二1bは、いずれも以下の記述で始まる（1aには巻頭画と賛があるが、後述に譲る）。

鼎刻江湖歷覽杜騙新書卷之一

浙江 夔衷 張應俞 著
書林 梓

この記述と、序文に“苜潭張子”云々とあることから、『杜騙新書』は張應俞の著書とわかる。

ここで問題となるのは、“浙江”・“夔衷”・“苜潭”の解釈である。潘建国氏は巻頭の記述から張應俞を“浙江夔衷人”と断じるが（「《歛喜冤家》与《杜騙新書》」、

『明清小説研究』1996年第2期)、吳朝陽「《杜騙新書》福建地方属性考述」(『明清小説研究』2014年第3期)や劉楷鋒「張応兪籍貫建陽考」(『武夷学院学報』2016年第2期)が考証するように、莒潭は建寧府建陽県の地名であるから、張応兪の籍貫は福建の建陽であり、浙江は祖籍なのであろう。

すると夔衷なる地名が未詳なのに対して、たとえば明弘治年間の『八閩通志』に林夔衷なる県丞の名が見える(巻五十六「選挙・歳貢・泉州府」16a、中国史学叢書三編本また北京図書館古籍珍本叢刊本)。これは近代の『同安県志』に見える、宣徳乙未(1434)の貢生出身者で知県を務めた林夔衷と同一人物であろう(巻十五「選挙・明貢生」12b、中国方志叢書本)。

したがって夔衷は、むしろ張応兪の字ではないかと考えられる。

ちなみに黄宗羲が弟子の陳夔衷らに招かれて、甬上証人書院で講義を行なったという趣旨のことを詹海雲「脱中入西、面向世界—談中国近代書院教育發展變遷的意義」(『湖南大学学報(社会科学版)』2007年第6期)は記すが、この弟子は陳夔衷ではなく、陳“夔献、字赤衷”のことであろう(黄宗羲「陳夔献墓誌銘」、『黄宗羲全集』第十冊、浙江古籍出版社、2005年)。

さて“夔衷 張應兪”に対応する明刊本巻頭の空欄であるが、日本に伝わる『杜騙新書』の写本5種のうち4種までが、そこに“漢冲 張懷耿”と記す。すなわち

国立公文書館

東洋文庫

筑波大学附属図書館

南方熊楠顕彰館

国会図書館

の5か所に蔵される写本のうち、国会図書館蔵本が空欄とする以外は、すべて第3行に“書林 漢冲 張懷耿 梓”と記されている(『「杜騙新書」訳注稿初編』、既出。閻小妹・氏岡真士「『杜騙新書』と南方熊楠」、『信州大学人文社会科学研究』第10号、2016年)。この漢冲も、“書林”に続く点も相まって地名ではなく、張懷耿の字と解釈できよう。

張懷耿の書肆名は敦睦堂であることが、慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵の『四書集注』から窺える。すなわち末尾の牌記に、“萬曆孟秋吉旦書林／敦睦堂張懷耿梓行”と記されている。

この『四書集注』は半葉9行×17字で、明の福建本としてハーバード大学蔵本(牌記“書林文峯堂／蔡瑞陽梓行”、別本牌記“書林克勤齋／余明台梓行”)や国立公文書館

蔵本（牌記“萬曆丙午年孟秋月／書林餘慶堂陳碧溪／重梓四方君子買者／須認攀龍附鳳為記”）と同じ系統に属すると思われる。ちなみに“萬曆丙午”は1606年、“須く攀龍附鳳を認めて記と為すべし”は牌記のあとに描かれた「攀龍附鳳」と題する半葉の絵を指す。敦睦堂張懷耿本の場合は魁星図となっている。

ところで敦睦堂という書肆が、曲本『摘錦奇音』（『善本戯曲叢刊』所収）を出している。末尾の牌記に“辛亥孟春書林張三懷梓”とあり、萬曆39年（1611）の刊行と考えられる。巻一～四の各巻頭にも“敦睦堂張三懷繡梓”とあり、巻五・六は敦睦堂ではなく書林の2字とするが、この2巻はさらに“菖潭張德卿校正”とも記す。

土屋育子『中國戯曲テキストの研究』（汲古書院、2013年）は『摘錦奇音』に関する記述のなかで、“菖潭は福建の地名であるので、敦睦堂は福建と関係のある書房と思われる”、“『中國古籍版刻辞典』（齊魯書社、一九九九）「敦睦堂」項は「張斐の書坊名」と記すが、「張斐」と「張三懷」が同一人物であるか不明”と指摘している。土屋氏が敦睦堂の所在地を断定しないのは、それが安徽の可能性もあるからだろう。書名が『新刊徽板……』と始まり、各巻頭に“徽歙龔〔=龔〕正我選輯”とあり、また内容的に関連する『玉谷新簧』などにも安徽の出版人が関与しているのは、これらが弋陽腔系諸腔の散齎集である以上もつともの話である。ただし土屋氏が挙げる13種を一覧すると、福建の出版人がさらに大きく関与していることも伺えるのである。

張氏の書肆については情報に乏しい。謝水順・李珽『福建古代刻書』（福建人民出版社、1997年）は「張氏刻書」の項を立て、方彦寿『建陽刻書史』（中国社会科学出版社、2003年）は「明後期建陽的其他書坊」の項に含めるが、いずれも張閩岳の新賢堂を紹介し、嘉靖年間から崇禎年間にかけての出版物を幾つか挙げるに留まり、上記の張氏たちについては触れていない。もっとも『建陽刻書史』は、別に元代建陽の雲衢張氏集義書堂の存在や明代正徳年間における雲衢堂張偉の活動に触れているが、それにしても張氏は、どうやら建陽の書肆として必ずしも大手ではなかったようである。

そこで『杜騙新書』について言えば、日本の江戸時代における相板（あいはん）のような形で出版された可能性を考えておく必要があるだろう。

5.

相板（合板とも書く）は、要は共同出版である。『杜騙新書』の場合、そのような背景が封面や序文から窺われ、さらに巻一・二と巻三・四の微妙な形式的差異が目目される。

明刊本『杜騙新書』の封面には既述のように、張氏の名は無く“存仁堂陳懷軒梓”と書いてある。前述の『福建古代刻書』や『建陽刻書史』はいずれも「（書林）陳氏刻書」

の項を立て、積善堂（や存徳書堂）に次いで存仁堂について記す。とくに『建陽刻書史』が詳しい。それによれば存仁堂陳懷軒は字が以信で、類書や小説をおもに出版していた。小説としては『杜騙新書』のほかに上海図書館所蔵の残本『詳情公案』を挙げているが、これは完本が東京大学東洋文化研究所に蔵され、ネットで全文公開されている。

江戸時代の写本『杜騙新書』に“書林 漢冲 張懷耿 梓”と記すものが多いことも前述したが、国立公文書館の写本はさらに封面に対応する部分もあり、そこには“居仁堂余猷可梓”と書いてある。建安の余氏は宋元明の三代にわたり有名な書肆だが、『福建古代刻書』や『建陽刻書史』によれば猷可は余応孔の字であり、かの余象斗の甥に当たることが諱に“応”の字を含むことから推察される。居仁堂の出版物として両書は『唐詩訓解』や『万巻星羅』を挙げるが、他に『易経初談講意』もあつたことが清抄本から窺える（夏衛東「浙図蔵《易》類善本古籍未刊題跋輯釈」、『文献』2016年第2期）。

さらにまた、明刊本のうち尊経閣文庫蔵本には“萬曆丁巳年（1617）”の紀年をもつ序文「叙江湖奇聞杜騙新書」が巻頭にあり、それは“三嶺山人熊振驥撰”である。『福建古代刻書』や『建陽刻書史』も紙幅を割くように建安の熊氏は明代の有名な書肆であり、熊振驥について詳細は不明ながら、彼もまた出版業に関わる人物であつたと考えられる。ちなみに方彦寿「建陽熊氏刻書述略」（『古籍整理与研究』第6期、1991年）は熊振宇に言及するが、この振宇は字で、その諱は成応である。

ともあれ明刊本『杜騙新書』の出版には、姓を異にする複数の書肆の関与が窺われるのだが、それと表裏を成すのは巻一・二と巻三・四の微妙な違いである。

まず各巻の第1葉を比較すると、いずれもa面は図と賛から成り、その賛は4文字のタイトルを別として20字から成るが、その20字が巻一・二では

水族多妖，一點犀光照破。心靈有覺，百般騙局難侵。
心隱深奸，妄作多端詭道。手持玄鑑，灼見五蘊奸萌。

のように4字句と6字句から成るのに対し、巻三・四では

我願君王心，化作光明燭。不照綺羅筵，偏照逃亡屋。
身似菩提樹，心如明鑑臺。時時勤拂拭，勿使惹塵埃。

のようにすべて5字句から成る。

またb面第1行のタイトルが、巻一・二では

鼎刻江湖歷覽杜騙新書卷之一（or二）

なのに対し、巻三・四では

新刻江湖歴覽杜騙新書卷之三 (or四)

となっており、冒頭の1字が異なる。

さらにタイトルの後、巻一・二は前述のように、著者として張応俞の名を記すなどしたあと本文に入るが、巻三・四はそれが無くただちに本文となる。

そしてもう一つ、本文をよく見てゆくと形式的な違いが見いだせる。すなわち巻一・二ではどの行にも20字ずつ綺麗に収まっているのに対し、巻三・四では若干の乱れがあり、それは版下作成時の見落としを後から修整した痕跡と観察できる。以下に例を挙げよう。

買其兄李鴉兒曰：你令妹是他人拐帶（巻三49b6）

“曰”の字は、次の“你”の右肩に、罫線に割り込んで小さく書かれている。

凡人之来者不迎（巻四20b8）

“人之”の2字は、1格分のスペースに縦に詰め込まれている。類例は巻四25b3・4、27a8、29a8、30a8、32a9、34b1、36a6、37a8、39a6、40a8、43b4、45b4・7、46b4にも見られる。

至晚飯後（巻四31a9）

“飯後”の2字は、1格分のスペースに小字で割注の如く横に書かれている。類例は巻四33b2、43a5にも見られる。なお次の例において、

皆趕上兩日路並不見踪而還（巻四39b5）

“兩日路並”の4文字が割注式の小字になっているのは、この1行で話が終わり次の行から評になるため、すべて大字だとこの1行が最終格まで埋まってしまうのを嫌って行なった処理だと考えられる。

傳奕……而胡僧自死，仲淹……而鬼自不来（卷四32 b 5）

“僧自”の間に空格1字分があり、それによって対句が成り立っている。類例は卷四37 a 5にも見られる（なお卷四37 b 2の空格の場合は、次の“聖朝”に敬意を表するためであり性質が異なる）。

ちなみに卷一25 b 3にも空格が認められる。

未半午後、已到口窰。

この空格には“回”が入るはずである。文脈から考えて、既出の地名“回窰街”に着いたという意味だからである。そして林羅山手沢本にも“回”の字がある。ただしここだけ前後と筆勢が異なり、空格として書写したうえで新たに補ったと判断できる。

ほかにも、明刊本の本文は基本的に各行を界線で分かちが、それが無いのは以下の各葉である（ただし他の葉との間に版心などの違いは見られない）。

卷一：7・11・13～18。（なお第23葉はa面に界線が無くb面には有る）

卷二：15～16・19～23 a・31～34。

卷三：ナシ。

卷四：ナシ。

加えて各巻末の書名は以下のように記される。

卷一：新刻杜騙新書一卷終

卷二：新刻杜騙新書二卷終

卷三：三卷終

卷四：新刻江湖歴覽杜騙新書卷之四終（“終”のみ小字）

以上の2点においても、卷一・二と卷三・四には相違があると言えよう。

6.

上述のように明刊本『杜騙新書』卷三・四において、版下にさらに修整を加えた部分が見られるのは、卷一・二とは対照的である。ここで注意すべきは、底本に最も忠実な写本と目される国立公文書館本（林羅山手沢本）においてもこれらの特徴が見いだせる

ことである。この写本が“居仁堂余献可梓”や“書林漢冲張懷耿梓”という記述を持つ点で現存の明刊本と異なることは前述した。その写本においてやはり上記の特徴が巻三・四に見られるということは、これらの特徴が改版や増刷時の修整ではないことを示唆している。

そのことと、さらに既述の各巻第1葉などにおける対照性を考え合わせれば、巻一・二と巻三・四の版木は、製作の姿勢や結果にズレが窺える。やはり『杜騙新書』の明刊本は、複数の書肆が版木を分担製作したうえで共同出版されたのではないだろうか。加えて封面における“存仁堂陳懷軒梓”なり“居仁堂余献可梓”という記述が、“梓”であって“蔵版”ではないことにも留意したい。“蔵版”なら版木が譲渡されたとも考えられるが、そうは書いていないのである。

ちなみにルシル・チア氏は陳懷軒存仁堂が1620～30年代に現行の『杜騙新書』を刊行し、そのさい張応愈の原作よりも収録する話を増補した可能性もあるというが、これは張応愈が浙江の人であり陳懷軒が福建の人であるという理解に基づく臆説であろう

(Lucille Chia. *Printing for Profit: The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17th Centuries)*. Harvard University Press, 2002, 377)。

それにしても“居仁堂余献可梓”や“書林漢冲張懷耿梓”と明記する写本が複数現存するにもかかわらず、その底本がいまだ発見されないのは残念である。このもう一つの明刊本『杜騙新書』に関する分析は、今後の課題とせざるを得ない。

※本稿執筆に当たりJSPS科学研究費補助金15K02433の助成を受けている。

【大連本の書き込み】

卷一

- 2 b 9 扭 竹有反、手搏也。
3 b 4 囧 鳥媒也。
4 a 3 拐 乖、求蟹反。
9 b 2 慕 明白反、上馬也。
12 b 4 凳 音鄧、牀__也。
15 a 7 丟 音柳、弃也。 ※字彙補一部、又端救切、柳去声、海篇棄也、今俗作端鳩反
24 b 3 籥 大管。 ※爾雅积楽、大管謂之籥。
24 b 9 擡 起也。
28 a 8 悒 羨兒 (=貌)。

28 a 8 闕 止也、終。
 29 a 7 叵 不可也。
 30 b 1 揪 音操。 ※シユウ？
 31 a 6 批 普迷反、擊也。
 34 a 6 屢 良遇反。
 34 a 6 唆 蘓戈反、喝。
 34 b 9 躲 下（丁？）果反、身也。
 35 a 3 拖欠 托何反、曳也。
 35 a 5 嘖 壯革反、鳥鳴。
 38 b 1 担 拂也。
 38 b 7 擒打 急持也。
 38 b 7 踢 徒即反、跌。
 42 a 3 挨近 乙駭反、推也。
 42 b 5 猜 千才反、恨也、疑也。
 45 b 2 扳 引也、攀也。
 48 b 1 圈套 懼免反、牢也。

卷二

2 a 5 桌 音卓、高也。 ※字彙、桌、竹角切、音卓、高也、又姓。
 4 a 9 滄 音奄、雲雨兒（=貌）。
 ※說文十一上、滄、雲雨兒。字彙、滄、於檢切、音掩、雲興貌。
 4 b 5 臧物 作郎反、藏也。 ※大広益会玉篇二十五、臧、作郎切、藏也。
 7 b 6 搬 音速、掌物也。
 ※字彙、搬、私谷切、音速、掌「足+扌」也、按此字今俗音般、 作
 搬移搬演字、無音速者、「足+扌」音旧、醜行之貌。
 11 a 3 捏 乃結反、捻也。
 11 b 8 呶 女交反、喧也。
 13 a 4 們 音悶、渾肥滿兒（=貌）。 ※集韻、莫困切、音悶、們、渾肥滿貌。
 18 a 2 瞞 眉安反、平安（目？）也。 ※說文四上、瞞、平目也。
 18 a 3 楨 音貢。
 18 b 3 扛 古厯反、对举也。
 19 b 2 擺 捕買反、兩手擊也。
 22 b 3 癩 音「疒+不+肉」、脚中病也。

- 25 a 2 查 浮木也。 ※和名抄船類、查、楂、宇岐々、水中浮木也。
27 b 9 姨 余昵（脂？）反、妻之娣妹云。
31 a 1 扼 音厄、握也。

（以下卷末52 b まで書き込みナシ、卷三・四もナシ。これは須磨源氏の類か。）

（氏 岡 真 士 信州大学 人文科学系 人文学部 准教授）
（閻 小 妹 信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 教授）
2017 年 1 月 12 日受理 2017 年 2 月 2 日採録決定